

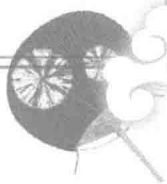
黄海玉、著

日本三教合一的
教育思想史研究
——以石田梅岩及其学问为中心——

日本におけるシンクレティズムの
教育思想史的研究
——石田梅岩とその学を中心に——

黄海玉 著

日本三教合一的
教育思想史研究
——以石田梅岩及其学问为中心——



660
1150

图书在版编目 (C I P) 数据

教师口语教程 / 岑玲主编. —成都: 西南交通大学出版社, 2014.7

普通高等教育“十二五”规划教材

ISBN 978-7-5643-3166-5

I. ①教… II. ①岑… III. ①汉语—口语—高等学校—教材 IV. ①H193.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2014) 第 142113 号

普通高等教育“十二五”规划教材

教师口语教程

主编 岑玲

责任编辑	邹蕊
特邀编辑	颜燕
封面设计	何东琳设计工作室
出版发行	西南交通大学出版社 (四川省成都市金牛区交大路 146 号)
发行部电话	028-87600564 028-87600533
邮政编码	610031
网 址	http://www.xnjdcbs.com
印 刷	成都蓉军广告印务有限责任公司
成品尺寸	148 mm × 210 mm
印 张	6
字 数	167 千字
版 次	2014 年 7 月第 1 版
印 次	2014 年 7 月第 1 次
书 号	ISBN 978-7-5643-3166-5
定 价	20.00 元

图书如有印装质量问题 本社负责退换
版权所有 盗版必究 举报电话: 028-87600562

まえがき

本書は、日本の文化的思想的基盤を神道・儒教・仏教のシンクレティズムという宗教的構造から捉え、その系譜を整理するとともに、江戸中期の儒者石田梅岩の学問と思想における三教思想の特徴を確認し、それを日本のシンクレティズムの系譜の中に位置づけるものである。

この研究を始めたきっかけは、広く言えば日本文化と人間形成のためのアプローチ、狭く言えば日本における儒教の問題によるものである。日本におけるシンクレティズムの形態はさまざまあるが、もっとも一般的なケースは〈神仏習合〉である。しかし、日本人の形成という角度から日本の文化的思想的土壌を考えると、つまり教育思想史の角度から日本文化を考える場合、〈神仏習合〉では些か説明しきれない部分があるように考えられる。というのも、古代より近代までのいずれの時代においても、思想的基盤の中心には儒教があったということが出来るからである。三教による日本のシンクレティズムは、日本人の意識的行動的パターンを形成し、歴史の中で多様に変化・発展を遂げながら今日にいたっている。その構造と関係を明らかにすることは、日本文化のエートスとしての思想的根源を正確に捉える上で重要な問題である。

このような視点に立って日本の文化的基盤を宗教的思想的構造の特徴において捉え、日本人の形成的意義を探ることは、教育乃至人間形成に関する研究と課題が益々細分化されていながら、昨今のさまざまな人間的社会的問題の発生に対してなおも試行錯誤や対処療法的措置が続いている現状において、その解決への総合的な方向付けと手掛かりにつながることを期待できると考える。

しかし、以上の問題はその亘る研究領域にしても、またその深度にしても、筆者一人では些か手に負えないところがある。本書はそのための単なるスタート、基礎的なアプローチにすぎず、従って今後さらなる掘り下げが必要である。

黄海玉

2015年5月吉日



石田梅岩肖像画



石田梅岩のお墓



京都堺町通りにある石田梅岩邸宅の跡

目次

序章 日本におけるシンクレティズムと石田梅岩の研究

1. 問題意識 \ 1
2. 日本におけるシンクレティズムの認識と研究 \ 6
3. 石田梅岩に関する先行研究 \ 10
4. 本研究の課題と方法 \ 16

第一章 日本におけるシンクレティズムの系譜

1. 日本におけるシンクレティズムの現状と特徴 \ 20
 - (1) 日本におけるシンクレティズムの現状 \ 22
 - (2) 日本におけるシンクレティズムの特徴 \ 29
2. 日本におけるシンクレティズムの系譜 \ 31
 - (1) 十七条憲法に見る三教 \ 32
 - (2) 空海の『三教指帰』に見る三教 \ 37
 - (3) 五山文学・禅に見る三教 \ 39
 - (4) 武士道に見る三教 \ 42
 - (5) 唯一神道に見る三教 \ 44

(6) 近世の思想的思潮としての三教 \ 46

第二章 石田梅岩とその学

1. 石田梅岩という人物 \ 50

(1) 出生と経歴 \ 50

(2) 時代的背景 \ 55

2. 梅岩とその学 \ 61

(1) 「性（心）を知る」 \ 63

(2) 「形に由る心」 \ 72

(3) 「儉約と正直」 \ 76

第三章 梅岩（学）と神儒仏

1. 梅岩（学）の思想的根拠に関する諸説 \ 83

(1) 神道 \ 84

(2) 儒教 \ 91

(3) 仏教 \ 96

2. 梅岩（学）における神儒仏の意味・役割 \ 99

(1) 神道 \ 99

(2) 儒教 \ 103

(3) 仏教 \ 104

3. 梅岩における三教（の関係）の特徴 \ 109

第四章 石田梅岩の世界観・人間観

1. 梅岩の世界観 \ 115

2. 梅岩の人間観 \ 125

第五章 石田梅岩の教育観・学問観

1. 梅岩の教育観 \ 134

(1) 個の形成 \ 135

(2) 社会的形成 \ 140

2. 梅岩の学問観 \ 148

終章 本研究の意義と今後の課題

1. 石田梅岩の三教思想の意義 \ 162

2. 梅岩学の教育学的意義 \ 165

(1) 知行合一 \ 167

(2) 自らの文化を生きる \ 168

(3) 庶民教育・社会教育における意義 \ 170

3. 本研究の意義と今後の課題 \ 173

参考文献一覧

序 章

日本におけるシンクレティズムと石田梅岩の研究

1. 問題意識

本研究は、日本の文化的思想的基盤を神道・儒教・仏教のシンクレティズムという宗教的構造から捉え、その系譜を整理するとともに、江戸中期の儒者石田梅岩（貞享2・1685—延享元・1744）の学問と思想における神儒仏（老莊を含む¹）三教思想の特徴を確認し、それを日本のシンクレティズムの系譜の中に位置づけることを目的とするものである。その基礎の上で、梅岩学の教育的意義の考察を通して、その可能性について確認したい。それは、以下のような状況と問題意識に基づくものである。

日本が世界から注目され、関心をもたれるようになったのはとりわけ戦後、例を見ない速さで復興を成し遂げ、経済的に先進国の列に肩を並べるようになってからのことである。その注

1 日本における老莊の問題は第一章にて詳しく扱っている。

目的的是は主として経済的發展を可能たらしめた理由について、日本の歴史・宗教・慣習・社会構造など、日本文化を構成するあらゆる要素から理解し解釈をしようとするものであった。一方の日本国内においても、経済と産業のグローバリゼーションのなか、他国との接触と摩擦において自らの特性の自覚とアイデンティティの意識を余儀なくされ、自国の文化と社会のもつ特異性を盛んに議論するようになった。このような日本文化に対する自・他からの議論は、学術の対象としても娯楽的話題としても活発に行われ、書物にも著されてきており、現在もなお続いている。

そしてこのような日本文化の特異性ととともに、日本人の特異性に関する研究が盛んに行われてきたことは言うまでもない。社会学・心理学・文化人類学など多くの領域において、それぞれの方法論を用いて日本人の行動様式、思考様式や対人関係などについて解釈と分析がなされてきたのである。

しかし、日本文化や日本人に対するこれらの議論と研究は、源了圓が指摘するように、「日本人の形成という角度からあまり取り上げられず、そしてその問題を文化や社会との相関関係において、しかも歴史的展望をもって問題を考察することが少なかったところにその問題が存在¹」するのであり、またその方法の一つとして、あるいはその一環として日本の宗教的・思想的角度からのアプローチと解釈がなされてきたとはなお言い難いのである。それはつまるところ、日本人の形成についての文化

1 源了圓『文化と人間形成』第一法規、1982年、24頁。

的土壌全体という視角からのアプローチであり、日本文化の源流と基盤という総体的視点からの確認となることでもある。このような視点に立って日本の文化的基盤を宗教的思想的構造の特徴において捉え、日本人の形成的意義を探ることは、教育乃至人間形成に関する研究と課題が益々細分化されていながら、昨今のさまざまな人間的社会的問題の発生に対してなお試行錯誤や対処療法的措置が続いている現状において、その解決への総合的な方向付けと手掛かりにつながることを期待できると考える。

日本文化の特徴の一つとしての宗教に着目し、その構造や文化を構成している他の要素との関連を考察することは日本人の形成を考える上できわめて重要なことである。とりわけ、現在のような時代的社会的状況の中にあっては、人間形成の全体的な理解や解明のために必要なことかもしれない。なぜなら、文化の諸要素（例えば慣習や制度、法律、芸術など）の中でも、宗教のもつ超越性や規範性、批判性といった部分が個人と社会に及ぼす影響力は遥かに直接的で大きく、宗教が他の要素の土台となることも多いからである。宗教は文化の核となる部分であり、「宗教が祭祀等を通じて文化の中に融合している面を認めながら、宗教の文化に対する超越性・批判性を尊重する」かたちで、「宗教と文化とが矛盾的緊張関係をもってつながっていくとき、その社会は正常である¹」といえるのである。したがって、文化における宗教の捉え方、または両者の関係を、

1 源了圓、前掲書6頁。

社会という、人間が生まれ、生活を営み、その中で自己と他者を形成し、死んでいくという、もっとも基本的で具体的な場において捉えることは、きわめて重要なアプローチであるということができるのである。

しかし、日本の文化的思想的基盤を神道・儒教・仏教によるシンクレティズムという構造の上に見ようとするアプローチの場合、儒教の宗教性に関する問題など宗教界に限定されるはずの部分もあるが、不必要な議論を避けるために、本研究ではそれを純粋な超越的な宗教学の次元においてではなく、文化的思想（史）的な立場から見ることにしたい。また、これらの問題との関連において、文化における宗教の存在を如何に捉え、位置づけるかということも重要な問題となってくる。この問題については、「宗教が祭祀等を通じて文化の中に融合している面を認めながら、宗教の文化に対する超越性・批判性を尊重することにもとづき」、「『宗教のある側面』だけを文化の中に入れる¹⁾」源了圓の見方に基本的に賛同する。本論文で主として触れて（扱って）いるのは日本文化における宗教的構造の問題ではあるが、それは宗教の独立性や原理、教理などに重点を置いた厳密な宗教学的な分析ではなく、宗教の「規範性・批判性」のもつ、生活世界における思考様式や行動規範への働きの面だからである。

日本文化と日本人の問題を宗教・思想という基盤から捉えるという同様の問題意識によるアプローチに、儒教・仏教・神道・

1 源了圓、前掲書6頁。

国学を伝統的思想として捉えた佐藤弘夫等の調査研究がある¹。同研究は「日本の伝統的思想を理論的枠組みとして用い、これによって現代日本人の価値観を捉えようとする試み」である、と述べているように、三教の思想が現に現代の日本人の生活と意識の中に潜んでおり、影響力をもつという問題意識に基づくものである点においては、筆者と考え方を同じくする。

「文化とは生き方である²」とする T. S. エリオットの定義にしたがえば、本研究で取り上げる石田梅岩の思想における世界理解、人間理解とそれに基づく生き方は（少なくともその時代の）日本文化とその中における人間の問題をもっともよく表わしているということができよう。なぜなら、「文化は、その中で自己を形成した人物のものの感じ方、ものの考え方、そして行為の仕方、一言で言えば『生き方』において自己をあらわにする³」からである。

以上の状況と問題意識を踏まえ、本章では日本の文化的思想的基盤における宗教的特徴として、神儒仏（老荘）によるシンクレティズムに関するいくつかの問題点を指摘し、その研究状況も合わせて見ておくことにする。そして、石田梅岩の三教思想に関する先行研究について整理をする中で、本研究の位置づ

1 大淵・佐藤・三浦「現代日本人の価値観と伝統的思想：仏教、儒教、神道・国学の思想内容と調査項目の作成」、『東北大学文学研究科研究年報』第 58 号、2008 年 3 月。この研究では三教に加えて国学も挙げているが、国学はその構成はさておき、「伝統的」という基準からして新しすぎる点を否めない、と私は考える。

2 T. S. エリオット、訳者代表深瀬基寛「文化の定義のための覚書」、『エリオット全集 V』中央公論社、1960 年、232 頁。

3 源了圓、前掲書（注 1）、7 頁。

けを行い、各章の課題を明らかにする。

2. 日本におけるシンクレティズムの認識と研究

日本の思想的文化的基盤を構成している伝統的な宗教として、神道・儒教・仏教を挙げることができる。儒教・仏教の伝来以来、三教は相互の接触と交流により複合的・多元的構造をなしてきた。

神道は日本固有の神観念にもとづく伝統的な神祇信仰である。もともとは自然崇拝の信仰から発生し、後に儒教や仏教・道教の教理を借りて体系を備えた宗教へと発展した。それは神社神道などのように後世において発展してきた形のものではなく、マツリやアニミズムなどに代表される原始信仰を指す。固有信仰としての原始神道は古代国家や共同体における支配的原理として、超越的な力をもって人々の集団生活を支える拠り所として存在してきた。そして儒教は、高度な理論性と完成された体系性をもって国家統治の道徳的理論的根拠として古代日本の朝廷に受容され、仏教はまた日本の神々を包摂する超越的存在としての世界観をもって受け入れられた。このような構造において、三教はそれぞれ独立したものとしての機能や意味、役割を保ちながら、相互依存・融合し、複合的機能を果たす形で存在してきたのである。三教の教理的世界観と信仰的儀礼的部分は摩擦を起こしながらも、相互に影響され補完されてきたのである。

日本の宗教的構造はこのように、固有の神祇信仰と外来の宗